

アメリカ留学日記 (5)

宗教を身近に触れてきて

～日本では得難い新たな視点～

早稲田大学政治経済学部3年・California Polytechnic State University San Luis Obispo 留学中

服部 祐也

winter quarter の final が終わり、留学生活も残すところ一学期となりました。今回は、日本ではなかなか機会の少ない、宗教を通じた体験を書こうと思います。(ただし、宗教とは非常に複雑なものなので、誤解してしまっている部分や知識不足である部分もあるだろうことを、最初にお断りさせていただきます。)

世界のグローバル化が進む現在において、ナショナリズムの問題と並び、宗教の違いから起こる対立も大きな問題となっています。世界の人々を理解するためには、宗教という概念を理解する必要がありますと判断、私はこの留学を通して、いくつかの宗教的活動に参加してきました。ここでは、それらのうち印象的だった、イスラム教の一日ラマダーン体験のイベント、それからキリスト教の貧困者救済プログラムについて書きます。しかし、まず最初にこのように私が宗教に接してきた理由から紹介していこうと思います。

1、私が宗教に接する理由

ー世界の人々を理解するためー

日本に住んでいると、「宗教」という響きはネガティブな意味に捉えられがちです(過去に日本国内で起きたいくつかの宗教が引き起こした劣悪な事件が、その否定的なイメージを助長しているでしょう)。日本人の宗教は仏教が大多数を占めているということになっていますが、私達の多くは日常的な宗教活動をしません。私の先祖の墓は仏教のものであり、墓地の数からわかるように多くの日本人がそうであると思います。しかし、仏教徒が大多数を占めるタイの人々の日常的な宗教的活動に比べれば、その違い明らかです。日本人の「仏教」は、宗教としてではなく、伝統として認識しているに留まっている、多くの日本人は実質的には無宗教に近い、といえるのではないのでしょうか。

そのような環境で育った私にとって、日常生活と宗教が密接に結びついている地で生活することは、とても新鮮でした。私の住んでいる San Luis Obispo が Mission のある街であることも影響してか、日本とは比較にならないほど到る所に教会があり、日曜になると多くの人々がそこに集まります。キャンパスではよく Hijab というイスラムの女性特有のスカーフを被った人達を見かけます。私が最近知り合った友達は、先週ユダヤ教の休日があり、

それを祝うイベントで伝統的なお菓子を作ったと言っていました。宗教という概念は日本では触れ難く、かつ世界レベルで見ると何かを信仰するということは当たり前のことです。世界の人々を理解するためには、宗教に接しておく必要がある、私はそう判断し、この留学を通して宗教を「客観的に」接して学んでいくことにしました。以下、イスラム教とキリスト教の活動に参加した経験のうち、特に印象的だった二つについて書きます。

2、イスラム教ー一日ラマダーン体験ー

ようやく留学生活にも慣れ始めてきた10月頃、ムスリムの学生達のクラブが主催するイベントである、一日ラマダーン体験に参加しました。イスラム教という私にとって未知である宗教への興味と、留学中に色々な経験をしたいという単純な理由からです。しかし、私はそこでイスラム教の体験をただけではなく、イスラム教の説明を通して、宗教が貧困者救済のアクターになりうる

ことに非常に関心を持ちました。

ラマダーンとは、一年に二回、二週に渡って行われる、イスラム教の修行の一つです。日が昇ってから日が沈むまでの間、飲み食い、そして喫煙をしてはいけないというものです。この日のイベントのルールは簡単で、6時8分～18時30分まで何も口にしない、もしラマダーンのことを忘れて食べてしまっても、思い出したときか



多くの貧困層が路上で生活する地域にそびえ立つ Union Rescue Missionの屋上から

らまた始めればよい、ということだけでした。その日の絶食が終わると、参加者200人程度がホールに集まり、振舞われたカレー・ナンなどのインド料理を堪能しました(その味は格別でした。「空腹は最上のソースだ」とはよくいったものです)。食事の間、ムスリムグループからイスラム教についての簡単なプレゼンがありました。

そのプレゼンで最も印象的だったのは、イスラム教が貧困層に対しての救済活動を行っているということです。このことは途上国の開発援助を専攻としている私にとって衝撃的なことでした。